

雪舟が涙で描いた  
ねずみの物語

# 井山宝福寺 [総社市井尻野]

りんざいしゅうとうふくじ

宝福寺は臨済宗東福寺派の中本山で、西国布教の一拠点として、地方のなかでも有力な禅宗寺院の一つに数えられていまにちりんたいあじやりす。寺伝によると創立年代は不明ながら、日輪大阿闍梨を始祖とする天台宗の古刹であったものを、鎌倉時代の貞永元年どんあん(1232)に当時の住職であった鈍庵和尚がこの地に新しく伽藍を建立したと伝えられています。

現存する伽藍は東面し、山門・仏殿・三重塔を一直線に配し仏殿の北方に庫裏・方丈を配しています。庫裏の東南方には鐘楼があり、方丈の西北方には禅堂が建っています。その他、経蔵・開山堂が広い寺域内に配され、本伽藍は地方にのこる近世禅宗寺院の代表的な遺構の一つとして注目されています。

雪舟が幼少の時、この井山宝福寺において涙で鼠を描き、和尚さんを大いに感心させたエピソードはあまりにも有名です。この逸話は江戸時代に書かれた『本朝画史』により伝えられる話です。  
「井山宝福寺」HPより



境内にある雪舟の像

少年が亡くなった。天寿を全うした。一人の泣いている少年を慰めなくては、その思いだけで幾万の夜を越えてきました。もう少年の涙の痕跡もなく、匂いもありません。ただ意識だけがそこに留まって生きてきました。しかしその少年がこの世の孤独から解放された。彼はもう苦しまずに済むのです。よかった。本当に、よかった。

わたしの身体の中には幾つもの意識が川のように流れています。それらは形を与えられることを求めている、時間の中で静かにうずくまっています。…とりわけ印象深かったのは一人の少年が生み出した一匹のねずみでした。そのねずみはかつて感じたことのないほどの情念でわたしの中に留まり、消えていきました。少年への強い思いがねずみを生かし続けたのです。



方丈 (国指定登録有形文化財)



三重塔 (国指定重要文化財)



仏殿 (国指定登録有形文化財)

万葉集の世界へ誘う  
物語

ごりゅうそんりゅういん

## 修験道総本山 五流尊瀧院 [倉敷市林]

えんのぎょうじゃ

今から約1300年あまり前、修験道の祖・役行者が霊夢の導きにより児島に上陸し、ご神体を安置して新熊野三山を開き、その高弟5人が尊瀧院、太法院など5つの寺院を設けたのが五流の始まり。今なお正統修験の総本山だ。1221（承久3）年の承久の乱で配流された後鳥羽上皇の皇子、桜井宮覚仁法親王が新熊野検校を兼ね下向され、続いて冷泉宮頼仁親王がこの地に庵を設け、五流尊瀧院の住職になられたという。後鳥羽上皇の遺骨を納めた石造宝塔は国指定重要文化財だ。

かくにんほうしんのう

れいぜいのみやよりひとしんのう

「まいられえ岡山」山陽新聞社より



三重塔（岡山県指定重要文化財）



熊野神社

（本殿：国指定）

2023年1月撮影

万葉集に収録の児島ゆかりの歌

「倭道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼しと思ふな」 6-966

（大和路は雲の彼方で雲に隠れてお目にかかれなくても、どうか私が袖を振ることを無礼だとは思わないでください）

「倭道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島思ほえむかも」 6-967

（大和への海路の途中、吉備の児島を通っていくと、筑紫に残した遊行女婦の児島のことと思われるだろうなあ）

### 登場人物

○藻塩焼きの娘―稲虫（児島） 孤児の少年―朱鷺 尼―手巾の尼

3人は、五流尊瀧院で行われたお日待大祭の施行で出会う。やがて稲虫は児島と名を変え、遊行女婦として筑紫へ赴き、大伴旅人に  
出会う。

それから二年、大伴旅人は、孫ほど歳の離れた児島を慈しみ、妻のごとく支えとしましたのじゃ。旅人は、この地で果てるかと覚悟を決めていた矢先、なんと大和へ帰京することとなりました。まこと都の政とは計れぬものにござりますなあ。

この物語では、五流尊瀧院で出会った手巾の尼と朱鷺が、二人が離ればなれにならないように児島を大和に送り出す……。

岡山大空襲の記憶  
が蘇る作品

## 西川緑道公園

〔岡山市北区〕



写真提供  
岡山県観光連盟



平和像

市内中心部を南北に流れる西川用水とその支流の枝川用水の両岸を緑道として整備した公園である。北から西川緑道公園（上流）、西川緑道公園、枝川緑道公園の3つの区域に分けて整備された総延長2.4キロメートルの緑豊かな緑道公園内には、噴水や水上テラスなどの修景施設や休養施設も配しており、散歩道として、また憩いの場として広く市民の方々に親しまれている。

公園内には、空襲当時の惨禍を回想して再び戦争の不幸を繰り返さないよう世界恒久の平和と郷土永遠の幸福を願う心の道標として、平和像が建立されている。 岡山市HP「西川緑道公園」より

## 市内に残る戦災の遺跡

やがて西川が見えた。すでに街は一面炎の海と化し、人々は西川の赤く染まった水面に次々と飛び込んでいた。「はよう、こっちへ」消防団の人が私と母に向かって手招きした。私が西川へ飛び込むと母も続いて川に入った。川に入っても熱風は強く、焼夷弾が近くで落ちる度に消防団の人がバケツで水を撒いて私たちの顔や頭を冷やしてくれた。炎は空高く渦巻き、立ち上った黒煙は天まで届いていた。焼夷弾はつきることなく、雨のように降り注いでいる…東の空に目をやると、岡山城が真っ赤に燃え上がっていた。

### 岡山城石山門跡

天守閣とともに国宝に指定されていたが、空襲で焼失した。石垣に残る赤茶けた焼け跡が空襲の激しさを今に伝えている。  
「市内に残る戦災の遺跡マップ」より



### 空襲で焼け残った岡山城月見櫓と西手櫓



月見櫓



西手櫓